# 若きイシュメイルの肖像：『白いジャケット』[1]論

丹　治　陽　子

## A Portrait of The Young Ishmael : *White Jacket*

Yoko TANJI

〔序〕

ハーマン・メルヴィルが初めて海に出ていったのは，1839年6月，彼が19歳の時のことである。その後，彼は捕鯨船や軍艦に乗組み，明るい南洋の島での生活をも含め，しばらく海に暮らすことになる。広大な海は，青年の冒険に対するあこがれをかきたてる場所にもなりうるが，名門の家系に生まれながら，7年前に，莫大な負債を抱えた父が精神錯乱のうちに亡くなるという経験をしたメルヴィルは，海を目前にしてどのような感慨にひたったことだろうか。『白いジャケット』は，1843年から翌年にかけて，メルヴィルがアメリカ海軍のフリゲート艦ユナイテッド・ステーツ号に乗組んだ時の体験をもとにして書かれた作品である。この小説が発表された1850年には，当時のアメリカの世論を賑わせていた海軍の鞭刑の実態とその是否についての議論が描かれていたために，『白いジャケット』は好意をもって受け入れられた[2]。しかし現在の私たちにとっては，そのような議論以外の部分にこそこの作品の面白さがある。それは，メルヴィルが当時の社会の動向に敏感に反応しつつ，『白鯨』という傑作に向かって進んでゆく姿なのである。ここでは，ジャケットの白さが意味することと悪の概念を中心にして，時代背景をも考慮しながら，『白いジャケット』の問題点を考えてみたい。

〔ジャケットの白さについて〕

語り手の青年は，「白いジャケット」と呼ばれている。それは，彼が異様な白いジャケットをいつも着ているからである。彼はペルーのカヤオで外套をなくしてしまい，船には余分なピー・ジャケットもなく，これから船が向かうホーン岬の厳しい自然条件に耐えるために，帆布でできた水夫用のゆったりした上着を改造してジャケットを作ったのだ。少しでも暖をとれるようにと，古い靴下やズボンの切れ端などを手当り次第に縫いつけて刺し子にしたので，ジャケットは，ぶくぶくにふくれあがってしまう。「白いジャケット」の最初の予定では，完成したジャケットにペンキを塗って防水するはずだったのだが，他

の水夫たちが同じ目的でペンキを散々使ってしまった後だったので，彼はペンキの配給を拒否される。防水をしていないために，「白ジャケット」は時化にであうと全身が吸水器になってしまい，天気になっても彼だけは相変わらずびしょ濡れのままでいなければならず，じめじめした天気の日には，ジャケットの毛管現象を利用して自分の湿気を吸取ってもらおうと，仲間が彼に寄添ってくるというのだ。こうして滑稽で哀れな「白ジャケット」は，自分の自由意思からではなく，「無情な運命」のいたずらによって，偶然に白い色のジャケットを着るはめになるのである。

彼はこのジャケットの内側に，身の回りの物を隠しておける，たくさんのポケットをつける。こうしてできあがったジャケットは，曲りくねった階段や謎めいた納戸，地下室や戸棚だらけの古城のイメージや，建物のイメージで紹介されている。また，ポケットに入れておいた本が長雨のために「オムレツ」になってしまい，しかたなくポケットの中身の全財産を出してジャケットを乾かせば，悪党どもにつけねらわれて持物をすられてしまうというくだりには，メルヴィル独特のユーモアが溢れており，白いジャケットがいかにやっかいな代物であるかが，面白おかしく伝わってくる。ここでは，ジャケットの「白さ」はあまり問題にされていない。色よりもぶざまな形や構造が，それを着ている者を道化に仕立てており，ジャケットは道化服となっているのだ。

しかし次第に，このジャケットは，それを着る者を疎外に導くという役割をも果たすようになり，白という色のもつ象徴性が物語を展開させ始める。

まず第1に，「白」は，若い主人公の純粋さ，イノセンスを象徴しているといえるだろう。メルヴィルは『白鯨』において船を世界の縮図と考えているが，彼はこの作品においても，軍艦は「浮かべる都市」であり，海軍は「つむじ曲がりの者たちの避難所，非運の者の収容施設」(p. 74) だと言っている。そして，狭い場所にこのような人々をぎっしり詰込み，外界との接触を断ったときに生じる悪は，陸の人々が想像できないような凄絶なものだとも言っている。このような場所にあって，「白いジャケット」は夢見がちなロマンティストとして，一般の粗野な水夫たちに少し距離をおいたところにいる。彼は，深夜にひとりで高い帆桁に上り，星空を眺めながら瞑想にふけっているうちに宇宙との一体感を持つような人物であり[3]，社会の中，あるいは自分自身の中に潜む悪と正面から対決を迫られるような経験をしていない若者なのである。

第2に，「白」は「白ジャケット」の優越感や誇りを象徴していると言えるだろう。軍艦の乗員は海軍士官と水夫というふたつの段級に分れているが，「白ジャケット」によれば，高いマストの上で仕事をする自分たちトップマンは水夫のなかで最も高貴な種族であり，生粋の船乗りであるという自負心を持って，いつも下界を見下しているという。そして彼は，このトップマンの仲間たちとだけは，このうえもなく親しくなれたと言っている。12章は，「軍艦の乗組員の気性の良し悪しは艦上でのそれぞれの部署や任務と大いに関係がある」という題である。ここで「白ジャケット」は，各マストのトップマンは，「下界の甲板のくだらない騒動，あらさがしの気苦労，卑劣さ」から遠く離れた高みにいるから「自由闊達な心と高邁な精神を持ち，明るくて，冗談好きで，寛大で」(p. 47) あると言い，自分の部署が軍艦の中でも最も高い帆桁であると言うことによって，彼は自らの優越性を

主張しているのである。また彼が言うには，士官たちに好かれるのは，「恥知らずで，魂のない人間，人間としての尊厳に欠ける人物」であり，反対に，彼らに本能的に嫌われるのは，「道徳的な感受性や，その人の内なる尊厳を暗示する人物」(p. 384) なのであるから，このような世界で疎外されることはむしろ，名誉だとさえ言えそうである。彼が，ネバーシンク号上では「水夫たちからいくぶん離れ，孤高を保っていた」し，「実際に面識がある人々は比較的少なく，親友はさらに少なかった」(p. 174) というのは，彼が単に世馴れない青年だったからというのではなく，自分は一般の水夫たちとは違うのだという彼の誇りが原因なのである。このプライドはおそらく，メルヴィル自身がガンズヴォートの血を引く者としていつも心に抱いていたプライドと重なりあうものだろう。だがはたから見れば，このようなプライドは目障りなだけである。彼の食事班の人たちは，彼が人目を引く真白なジャケットを着ているのは，彼の気取りと尊大な態度の表われだと考えて反感を持ち，彼を班から追放してしまう。しかしその結果，彼は自分が敬愛するジャック・チェイスに代表される「知的にも肉体的にも優れた人々」(p. 62) の集りである食事班に迎えられ，一般の水夫たちの社会からは疎外されたものの，誇り高き人々の仲間入りを果たすのである。

このあたりから，「白」は死（生命からの疎外）の象徴性を強めてゆく。『白鯨』の「鯨の白さ」という章[4] にも書かれているように，白は無垢の色でありながら，もう一方では，スタテン島の白さのように，この世のものならぬもの，不毛性，孤独などを意味している。「白ジャケット」は，新しい食事班の13人目のメンバーであるという理由で不吉なイメージを与えられ，夜，マストの上で冥想に耽っているところを幽霊と間違えられて，危うく命をおとしそうになる。また，白い色が目立つために上官からいつもつらい仕事を次々と押付けられる「白ジャケット」は，今や彼の命を脅かすこのいまいましい衣装を誰かのものと交換しようとして断られ，ついにせりにかけることになる。しかし，船の上でせりが行われるのは，普通，誰かが死んだ人の持物を処分するためなのである。せりに出された死人の持物の中に白いジャケットを見つけた人々は，驚き怪しみ，「死」の連想を強めたジャケットに買手はつかなかった。このジャケットから逃れるには重りをつけて海に沈めるしかないと「白ジャケット」は考えるが，もしもそのようにしたなら，ジャケットは海の底に広がってしとねとなり，将来，自分が死んでそこに横たわることになるという不吉な予感が，彼の脳裏をかすめるようになる。「白ジャケット」は，初めから，ジャケットの白さを経かたびらの白さになぞらえていたが，ここにきて，ジャケットは彼の死を深く暗示する物となっている。そして実際に，航海の終わりも近付いたヴァージニア岬の沖で，「白ジャケット」は帆とジャケットを見間違えて帆桁からまっさかさまに海に墜落し，水を吸ってまとわりつくジャケットを「まるでわたし自身をまっぷたつに切裂いているように」(p. 394) 無理やりナイフで切り裂いて危うく死を逃れ，自由になるのである。白いジャケットを白ざめだと錯覚した水夫がもりを打ち込み，忌わしいジャケットは串刺しにされたまま，海の底深くへと姿を消してゆく。

こうして，白いジャケットは，「白」という色の象徴性が高まるにつれて道化服から死の象徴へと変化してゆき，物語は，主人公が古い自我の象徴でもあるジャケットを切り裂

いて生きのびることにより，一般に，青年のイニシエーションの儀式と考えられる死と再生のパターンを経験するところで終わっている。そして多くの場合，「白ジャケット」がマストから落下してジャケットと訣別することは，他の水夫たちから孤立し疎外されていた彼が自分だけの世界の殻を破り，民主的な同胞意識に目覚めて，水夫たち，さらに広く解釈すれば人間たちの輪の中に入ってゆくこと，彼が個人主義から民主主義へ進んでゆくことを意味していると考えられている[5]。しかし，ラリー・レノルズの言うように，「作品そのものの中にそのような解釈を支えるものを捜してみてもみつからない」[6] のであり，再生した「白ジャケット」は成長の結果としてどのような新しい自我を獲得したのかと問われると，いまひとつはっきりしない。「白ジャケット」はジャケットを失った後もアリストクラティックな自負心を失なわず，彼を拒絶した粗野な水夫や水兵の仲間になりたいという欲求も全く持たないのである。

しかし「白ジャケット」のイニシエーションがこのように中途半端に終わっていることは，作品全体を視野に入れてみると，必ずしも物語の失敗にはつながらない。それはむしろ，さらに大きな問題を作品にとりこもうとした結果おこったことであるといえるだろう。というのは，イニシエーションが不徹底になる原因は，孤高を捨てたときに主人公が迎え入れられるはずの人々の輪（平水夫や水兵たち）が，デモクラシーを支えてゆく基盤となるべきものでありながら，否定的な要素を含んでいるからにほかならないのであり，当時の時代精神が，作品に微妙に反映されているのを私たちはここに見ることができるからである。

〔デモクラシーの諸相〕

ここで，デモクラシーについて少し考えてみたい。『白いジャケット』は，出版当時の一般読者には，アメリカ海軍の鞭刑に人道的な立場から激しく抗議する文章として読まれていた。その抗議の論拠は，鞭刑は人間に本来そなわっている尊厳に反するものであり，アメリカの民主的体制や宗教，道徳など，何に照らしあわせてみても排除しなければならぬ悪だということである。メルヴィルは，アメリカこそ政治的自由と平等の思想の上になりたつ理想的な国家であり，その民主的な精神は，海軍の軍規をはじめ，社会のすみずみにまで，徹底されなければならないと述べている。

ところで，この鞭刑はイギリス海軍から引き継がれた過去の先例であることから，過去と未来についてのメルヴィルの考え方が示される。彼によれば過去とは死であり，希望のかけらも見られない暴政の歴史，人類の敵であるが，未来は命と希望と成就の喜びに溢れる，「人類の友」(p. 150) である。独立によって過去を断切らざるをえなかったアメリカは，先例を作ることにより，世界のパイオニアとして後世の人々の師となる運命にあるという。そして，17世紀のピューリタンたちがアメリカにもたらした選民思想と使命感が，「僕らアメリカ人は等しく選ばれた民——現代のイスラエル人なのだ」，あるいは，「神は，人類が僕らの種族から大いなる事を期待するということを予め運命づけられていたのだ。……僕らは世界のパイオニアだ。」(p. 151) という言葉になって現われてくる。また，アメリカの若さと未経験こそが力と知恵であると確信し，「僕らがアメリカに善をなそうと

すれば，それが必ずや世界に施し物をすることになる」のであり，アメリカにおいて，「地上の歴史が始まって以来初めて，国家的な利己主義（national selfishness）が限りない博愛主義」（p. 151）となるという，アメリカへの熱狂的ともいえる信頼を語っている。

このようなナショナリスティックな意見の背景には，アメリカの歴史の大きな流れがあるといえるだろう。19世紀になって，アメリカは広大な領土を手にいれることになったが，その始まりは1803年のルイジアナ購入であった。この時，アメリカの領土は一挙にそれまでの2倍以上になった。1819年にはスペインからフロリダを買収し，1845年にはテキサスをメキシコから独立させて合併している。この年，ジョン・オサリバンによって，「大西洋から太平洋にいたるまでの土地を領土とすることがアメリカの『明白な運命』（マニフェスト・デスティニー）である」というスローガンが提唱されるようになり，1846年のオレゴン領併合，1848年にはカリフォルニアとニュー・メキシコの買収を経て，アメリカはほぼ現在と同じ領土を獲得するに至った。そして翌1849年には，ゴールドラッシュによって国中がわきかえったのである。この間に，ニュー・イングランド地方を中心として産業革命が進み，1828年には，それまでの名門出身の大統領たちとは違って，まさに庶民の代表とよべる西部出身のアンドルー・ジャクソンが大統領に選ばれていた。

広大な領土の広がりと一獲千金の夢，因習にとらわれない「コモン・マン」を基盤にしたジャクソニアン・デモクラシーの時代を迎えて，アメリカの国民が自国の将来に対して明るく楽観的な信頼を寄せ，これからアメリカが世界の歴史の中で指導的な立場に立つべきであるという自負心を育んでいたことは想像にかたくない。メルヴィルが『白いジャケット』の中に記したアメリカへの熱烈な賛辞は，このような時代の精神を代表するものだと言えるだろう。

だがこの時期は民主主義体制の持つ矛盾がしだいに露呈しはじめた時でもあり，民主的で公平な政治のために導入された猟官制の腐敗やアメリカ政府のインディアン政策など，現実に目を向ければ，人間の善性を信頼し，デモクラシーを賛美するだけで終わることができない時代であった。民主国家アメリカを守るためのアメリカ海軍に，人権を全く無視した制度が温存されているという具体的な矛盾を扱うことによって，メルヴィルは人間の持つ悪の性質とデモクラシーの関係についても考察することになるのである。

メルヴィルはレムズフォードという水夫に「大衆（the public）はロバの頭にヒヒの身体，そしてサソリのしっぽを持つ（まぬけで腹黒い）怪物で，人民（the people）とは全く違うものだ」（p. 192）と言わせているが，これが人々の集団に対する彼のふたつの見方であろう。つまり理想主義的なメルヴィルは「彼らの尊厳と平等を高く評価するとともに，彼らとの民主的な同胞愛を快く認める」のであるが，現実的な目を持つメルヴィルは，「人間が堕落し，卑しく，無知であることを知っており，彼らに対して優越感を抱く」[7]のである。そして彼のこの分裂した意識とデモクラシーへの洞察が，『白いジャケット』の中の水夫たちを“the people”と“the public”とに分け，「白いジャケット」のイニシエーションを，アリストクラティックな仲間に帰属するというところまでで終わらせ，人類全体に同胞愛を抱いているかどうかについては曖昧にしているのであろう。個人としての人間の尊厳や可能性を高く評価しながらも，人々が集まったときに，それが民主主義の理

想を実現できる「人民」とならずに，個々の人間が持つ堕落した性質が増幅された暴徒の集団となることを警告するのは，メルヴィルだけでなく，ソローやホイットマンなど，民主主義の第2世代であるこの時代の作家に共通する特徴であろう。

〔悪の諸相〕

ここまでの部分では，『白いジャケット』を，ジャケットの白さが意味することとメルヴィルのデモクラシー観についてみてきたのであるが，これらの問題の背後には常に悪の影がつきまとっている。白いジャケットがひきおこす疎外という問題については，青年を疎外する側の悪意と，自分の世界にとじこもって疎外されることを正当化しようとする悪があり，デモクラシーについては，個々の人間が持つ悪の性質をどのようにして押えてゆくかという問題があるのだ。『白いジャケット』の副題は『軍艦の世界』であるが，ここに描かれているのが，海軍の非合理的な規律に縛られ，自由と平等を奪われた人々の生活であることを考えれば，この物語は悪についての物語であるともいえる。ここに現れる悪とはどのような性質のものなのかを次に考えてみたい。

悪が蔓延している軍艦の中には大きく分けるとふたつの階級があり，ひとつは平水夫たち，もうひとつは艦長および士官たちである。そして後者は「戦時条例」を盾にして，前者に絶対服従を強要している。メルヴィルは水夫たちが，当然罰せられるべき悪を行っていることを認めたうえで，ソフォクレスの『オイディプス王』やシェリーの『チェンチ伯爵』を例にあげ，彼らの悪のひどさはこれらの劇にみられるものを上まわるようなもので，それが存在すると書くことさえ忍びがたいのだから，読者はこれ以上詮索しないようにと忠告している（p. 376）。だが彼は，水夫がこのような悪をなすのは，「彼らが横暴で不条理な海軍の法に縛られているからなのだ」（p. 304）と言っている。また，水夫を虐待する士官たちの悪についても，彼らに人間的欠陥があるからおこるのではなく，海軍という体制の持つ体質が作りだすものなのだと述べている。つまりメルヴィルは彼らを根本的な悪人とは考えていないのである。

同じことが，クラレット艦長についても言える。4人の水夫が鞭刑に処せられる場面（33章）では，刑の執行を冷ややかに見守るクラレット艦長が，非人間的に描かれている。だが，艦長の命令に背き，自我の象徴である髭を剃るのを最後まで拒否した誇り高き老人ウーシャントに鞭刑を言いわたすときのクラレットは，少し違った描かれかたをしている。彼はウーシャントに同情をよせ，「おまえを鞭うつのは残念だが，わしの命令は服従されねばならん。」と言い，老人に再考を促すのだが，それでも老人が考えを変えないのでクラレットは激昂し，鞭刑を命ずる。しかしメルヴィルはこのようなクラレットに対しても，「クラレット艦長がネバーシンク号でどのような罪を犯したにせよ，それは彼個人の冷酷な性質からおきたことではなかった。彼が彼たるところは海軍の慣習が生んだものだった。彼がただの陸人種だったら……あれでも心の優しい人とみなされていたにちがいない。」（p. 367）と言っている。このように，レムズフォードのいわゆる“the public”でまとめられる人々は，メルヴィルに言わせれば，本質的な悪人ではなく，彼らの為す悪は社会の構造が作りだした悪にすぎないのである。

人間は原罪を背負っていて決して悪から切り離されることができない存在であるというメルヴィルの考え方は，理想的な人物であるジャック・チェイスでさえも悪とは無縁でないということからわかるであろう。彼は勇敢で，マストドンのように大きな心を持つ，ヒューマニティーあふれる人物である。しかしあとになって，左手の指が1本ないという彼の奇妙な特徴から，彼がナヴァリノの凄惨な海戦で意気揚々と戦っていたという過去が明らかになるのである。また「白ジャケット」自身も，鞭刑を言いわたされ，刑の執行の直前で解放されるという息詰まるような場面で，クラレットに対して殺意を抱き，自分の中にある悪と，一瞬ではあるが対決を迫られるのである。メルヴィルはこのふたりの持つ悪を，一般水夫たちのあいだに見られる「語るのもはばかれるようなひどい悪」と区別してはいない。どのような人間の中にも悪の芽は存在するのであり，たくさんの人間が船に乗せられ幽閉されると，ぎっしり詰込まれた梨と同様に，互いが触れ合うことにより互いを腐蝕させ，悪はしだいに増幅し，蔓延していくというのがメルヴィルの説明である。

ここまでは，人間に与えられた性格に根差す悪，人間が理解できる悪の話である。しかしメルヴィルはここにとどまらず，さらに人間の理解を拒む根源的な悪を物語に登場させている。それは艦内の警察権を握る先任衛兵伍長ブランドに体現されている。彼は自らが秩序を取締まる立場にありながら禁を破って艦内に酒を持込んで密売し，一方ではその酒を買った者たちを検挙しては極刑をあたえていた。この男には，よこしまなまでに繊細な口と，蛇を思わせる黒い瞳を除けば，内面の悪を思わせるものは何ひとつない。それどころか，洗練された紳士然とした身のこなしで機知に富んだ会話を得意とする人物であり，艦内ではジャック・チェイスを除けば最も楽しい，あるいは最も親しみやすい（companionable）と思える魅力的な男なのである。彼が刑を解かれて自由の身になったとき，慇懃で確信に満ち，紳士的な愛想の良さを忘れず，恐れ知らずの親しみやすさを示すので，誰もが面食らってしまう。メフィストフェレスのような資質を持ったブランドのことは，誰も憎みきれないのである。しかしメルヴィルによれば，この男は「手のほどこしようのない本質的な悪人であり，牛が草を食むようにして悪しきことを行う。なぜなら悪魔のような彼の全体質にとっては，邪悪なことを行うのが正しい機能である」（p. 188）ように見えるからである。

このように，ブランドは他の水夫たちとはまったく異質な悪の権化であり，どの人間の性質の中にも見られる悪では説明できない存在であることがわかる。しかし，この人物はメルヴィルによって十分に劇化されていないので，彼の象徴する悪の本質を知るには，キューティクル医師が持っている標本の助けが必要である。

自らが「生と死のつぎはぎのような」グロテスクな存在であるキューティクル医師は，自分の部屋に，ありとあらゆる人間の奇形の石膏模型を揃えているが，一度見た瞬間にあまりの恐ろしさに目を奪われ，魂も凍りついてしまうのは，年配の婦人の頭部である。この婦人の額には，雄羊のような，ねじ曲がった見るも恐ろしい角が下向きに生えており，それは顔に半ば影を落としている。しかしこの婦人の頭部をしばらく眺めていると，凍りつくような恐怖は消えてゆき，見る者の心は，悲しみで引裂かれそうになるという。なぜなら，この婦人の頭部は，「奇妙におだやかで柔和であると同時に，絶えずさいなまれ，

永遠に救われぬ悲しみを不思議なほどに表していた」からである。これを見る人が，「それはどこかの女子修道院長の顔で，この女は何かロにするのも恐ろしい罪のために自分から人間の社会を捨て，希望がなく苦悶だけがある悔い改めの人生を送っていたのだろう」(p. 249) と思っても不思議ではないくらい悲しく衰れな姿だったのである。この婦人の額の角と，それが象徴する罪については，さらに次のように書かれている。

> その角は霊魂が肉体に入る以前に心に思い抱かれ，犯された不可解な罪に対する呪いの印のようにみえた。だがその罪は自発的に求めたものではなく，なにか強要された罪のようでもあり，宿命という冷酷な必然からおこった罪のようでもあり，その罪のために罪人は潔白であるにもかかわらず悲しみに沈んでいるといった罪のようにも見える。(p. 249)

ここにあらわされている罪とは，人間の力が全く及ばない世界から人間に対して不条理にも押しつけられてくるものである。メルヴィルはこの罪の背後に，太古からこの世界の中に脈々と存在し続ける，人間の理解力をはるかに越えた巨大な悪の存在をみているのではないだろうか。ブランドという悪人をこの世に送り出しているのもまたこの悪なのである。メルヴィルは次の作品『白鯨』のエイハブに，この悪について次のように語らせている。

> いいか，目に見えるものはみな，いわばボール紙の仮面のようなものにすぎんのだ。だがな，どんな物事にでも——疑うことのできぬこの生の行動の中では，その理性を持たない仮面のうしろから，何なのか知恵では分らんが，ちゃんと筋道通った理性を持つものが，ぬっとその顔貌をもたげてくるのだ。打つというならその仮面を徹底的に打ちぬくんだ。その壁をぶちぬかないで，いったい囚人はどうして外に出られる？おれにとってはあの白鯨が，ぐっとそばまで押出されてきているその壁なんだ。……おれは彼奴のうちに途方もない力と，そいつを支えている何とも正体のつかめない悪意を認めるのだ。おれの憎くてならないものはその正体のつかめないものなんだ[8]。

このようにエイハブ船長が世界の事象を覆う仮面の下に存在しているのではないかと疑い，命を賭けて見極めようとしている悪の存在は，ブランドと額の角が象徴する悪と同じものなのである。ブランドの魂の底にある苦しみと，逆境にあっても自己をよく支えている壮烈さを思うと，「白ジャケット」は彼を「嫌悪，哀れみ，賞賛と，なにか憎悪とは正反対のものが混ざりあった感情で」(p. 188) 見ずにはいられなかったと言っているが，悪に魅入られてしまった，あるいは悪に取付かれてしまった人へのこの畏敬の念は，イシュメイルが悪に打ちかかっていくエイハブ船長に抱いていたのと同じ感情である。そしてそれはメルヴィルの，悪への関心の深さを示している。

**〔『白いジャケット』から『白鯨』へ〕**

このように見てくると，『白いジャケット』の中でメルヴィルの意識に上ってきた「悪」

の問題は，『白鯨』において深く掘下げられ引き継がれていくことがわかるだろう。『白いジャケット』では，ブランドや額に生えた角に象徴される「根源的な悪」が呈示されるだけで終わっているが，それはひとつには，この小説がアメリカ海軍の実態を告発するという現実的な報告文学の一面を持つからだ。しかしその他にもふたつほど理由が挙げられる。第1は信仰の問題である。メルヴィルは「神は天上の英知に溢れているが，神の福音は地上の実際的な知恵に欠けている」(p. 324) ように思われると述べている。これは『ピエール』のプリンリモンの言葉を思い出させる意見である。だがこれは神に対する単なる糾弾の言葉ではない。なぜなら，この引用に続いてメルヴィルは，しかしこのことからわかるのは「キリストの性質はただ単に人間的だったのではない――それはただの俗人の性質ではなかった」と言い，神の絶対的な超越を認めているのである。また，「汝左の頬を打たれなば右の頬を向けよ」という言葉を引き，「この句こそキリスト教の精髄である――この句がなかったらキリスト教は他のどの宗教とも同じになるはずだ」(p. 320) と言って，キリスト教の犠牲の精神を評価しているのである。このようなキリスト教の神への信頼があるために，メルヴィルは悪にのめり込まずにすんでいるといえる。第2には人間の限界を認める謙虚さであろう。メルヴィルは「我々自身が運命である」(p. 321) と書いているが，この言葉の裏にあるのは「人間の意思がはるかな星の軌道まで動かせる」(p. 321) というエイハブ的なごうまんさではなく，「僕らに対して，罪悪のなかで最悪のものをむやみに行っているのは僕ら自身なのだ。」(p. 399) と認める謙虚さ，あるいは冷静な意識なのである。そしてこの謙虚さと敬虔な心から，「宇宙的な視野を持てば我々が悪いと思うことも正しいことなのかもしれない」(p. 186) という善悪の相対性という視点と，悪に対する寛容な性格が生れてくるのである。

『レッドバーン』と『白いジャケット』を4ヶ月間で書きあげたメルヴィルは，岳父のレミュエル・ショウに宛てた1849年10月6日の手紙の中で，次のように語っている。

> ……この2作は，金のためにやったふたつの手間賃仕事です。木を挽かなければならない人の場合と同じように，やらざるをえない身過ぎ世過ぎの事なのです。僕が書きたいと思うような本を書くのを我慢せざるをえなかったものの，このふたつの作品を書く際に，余り自分を押えることはしませんでした。2作に関する限りそうなのです。……ぼく個人に関する限り，それに財布の心配をしなくてもよいのならば，はずれとされるような作品を是非書きたいものです。

そうして彼が書きたかった，はずれとされるような作品『白鯨』は2年後の1851年に出版されたのである。そこでは白という色が人に与える恐怖感，死や疎外のイメージがさらに徹底して考察され，自然の美しい色彩もその物自身の中に存在するのではなく，それ自体では白または無色の光の魔術によるものであると述べられるにいたって，「生気をうしなった宇宙は我々の前に癩者として立ち」はだかり，我々は「全光景をおおった白色の大経かたびらの前に，盲いたもののように呆然となる。」[9] のである。そしてこの「白」という色と，メルヴィルがブランドや額の角の背後に見た「悪」の存在がむすびついて，初めて

モウビー・ディックが登場してくるのである。

このように見てくると，『白いジャケット』は「ジャケットや軍艦などの単なる断片的な象徴に頼っている」[10]小説というよりも，「白」の持つ象徴性，デモクラシー，根源的な悪の存在などの問題と，青年のイニシエーションの問題とが，メルヴィル独特の力技によって密接にからみあわされた作品であることがわかるだろう。そしてこのような『白いジャケット』を書くことによってはじめて，メルヴィルは『白鯨』という傑作をこの世に送り出すことができるようになったのである。

注

1) Herman Melville, *White-Jacket or The World in a Man-of-War* (Evanston & Chicago: Northwestern University Press and the Newberry Library, 1980). 全ての引用はこの版により，頁付けは括弧の中に示す。
2) Charles Anderson の *Melvill in the South Seas* によれば，鞭刑の廃止を求める声は1845年ごろから高まり，1848-49年には下院でこの制度についての激しい論争がおこり，1850年初めには鞭刑廃止を求める陳情書が議会に殺到し，同年9月28日にこの刑は廃止された。メルヴィルが『白いジャケット』を書いたのは1849年の夏，出版は1850年3月である。
3) 『白鯨』のイシュメイルも同様の性格をもっていることが35章に見られる。以下『白鯨』からの引用は，Herman Melville, *Moby-Dick* (New York: W. W. Norton & Company, 1967) による。
4) *Moby-Dick*, Chapter 42.
5) James E. Miller, Jr., *A Reader's Guide to Herman Melville* (New York: The Noonday Press, 1962), p. 70-74.
6) Larry J. Reynolds, "Antidemocratic Emphasis in *White Jacket*", *American Literature*, Vol. 48 (March 1976), p. 25
7) Ibid. p. 15.
8) *Moby-Dick*, p. 144.
9) Ibid. p. 170.
10) Warner Bertoff, *The Example of Melville* (New York: Norton & Company Inc., 1972), p. 34-35.